

「豆太は見た」の場面の教材研究

豆太は、真夜中に、ひよつと目をさました。頭のうえで、くまのうなり声が聞こえたからだ。

「じさまあつ。」

むちゅうでじさまにしがみつこうとしたが、じさまはいない

- ・ ひよつと〓思いがけないさま。不意に。ふと
- ・ うなる〓（獣が）低く吼（ホ）える。
- ・ しがみつく〓力をこめてとりつく。強くすがりつく。

すやすやと眠りこけていたら、突然、すぐ頭の上から、「グオーツ」と、熊のうなり声が出た。全く無防備なところに不意打ちを食らった状況。誰だってパニックになる。ましておくびよう豆太。「うわつ、食われる！」「殺される！」。極限状況の中で必死にじさまを呼ぶ。「じさまあつ」つと必死で助けを呼ぶ声は、裏返って声になっていなかったかもしれない。

ここは、子どもたちに様々な音読させたい。読みを聞き合ひ、「誰のがいいなと思っただ？」「どこを読んでそう思うの？」とやりとりする中で、「頭の上で、くまのうなり声」と「じさまあつ」との叙述のつながりを読み取らせたい。また、「じさまあつ」の音読を深めていけば、そのときの豆太の動きもありありと見えてくるだろう。

「どんな豆太の姿が見えてくる？」

と投げかけ、「むちゅうでしがみつこうと」する豆太を映像化させていく。子どもたちの頭に浮かぶ豆太の姿を語らせる。

「ま、豆太、心配すんな。じさまは、じさまは、じさまは、ちよつとはらがいてえただけだ。」まくら元で、くまみたいに体を丸めてうなっていたのは、じさまだった。

「むちまっ。」

こわくて、びくくらして、豆太はじさまにとびついた。

・こわいⅡある状態に対して、こちらが脅威や危険を覚える場合に用いる。
「恐ろしい」と相通じるが、「恐ろしい」は特定の対象に対する恐怖からくる旋律を覚えるような状態 態の客観的叙述

「こわい」はある状態・状況・場面などに接して身の危険や脅威・恐怖などを感じるが、それをうまく処理したり、解消したりするべきがなく、避けられない立場にあることに由来する感情。また、そのような気持ちを抱かせる対象の状態

・びつくりⅡ(当て字で「吃驚」「喫驚」と書く)不意のできごと(驚くさま)。

「くまみたいに体を丸めてうなっている」じさまの姿が豆太にどう見えただろう？

「ま、豆太……」と、とぎれとぎれに絞り出すようなじさまの声は豆太の耳にどんなに聞こえただろう？「こわくて」「びつくらして」という叙述を手がかりに読み深めさせたい。

「こわくて」

熊のようになってうずくまり、必死に痛みをこらえてうなり声をあげるじさま。「ちょっとはらがいてえ」どころではない、死の恐怖を感じるようなすさまじい姿を目の当たりにしながら、幼い豆太には何をどうしていいのか分からない。それが「こわい」の中身だと私は読む。

「びつくら」

眠りから覚めていきなりこんなじさまの姿に直面した、という「びつくり」は当然ある。それ以上に、こんなじさまの姿を見たことがなかった、初めて見た、という「吃驚」がある。

豆太の中にある「じさま像」は、

「六十四の今、まだ青じしをおっかけて、きもをひやすような岩から岩へのとびうつりだって、見事にやってのける。」

「ぐつすりねむっている真夜中に、豆太が「じさまあ。」って、どんなに小さい声で言っても、「しょんべんか。」と、すぐ目をさましてくれる。」

という、強くたくましく、頼りになる「じさま」だった。その「じさま像」と目の前のじさまの姿は全くむすびつかない、そういう驚愕としての「びつくら」がある。

「今までに、こんなじさまの姿を豆太は見たことがあった？無かった？」と子どもに問い、この叙述と結んで、「びつくらして」を読ませたい。

「じさまごとびつた」

とびつく＝身をおどらせて抱きつく。とびかかる。

心を惹きつけられたものに衝動的に近づき求める。

なにをどうしているのか分からない豆太は、夢中だとびつくしかなかった。

「じさまっ、しつかりして！いつものじさまに戻って！」という思いで

けれども、じさまは、ころりとたみに転げると、歯を食いしばって、ますますごくうなるだけだ。

医者様をよばなくっちゃ。

・ころり＝球状、円筒状のものが、一回、転がったり倒れたりするようす。
突然に、また、たやすくその状態になるようす

いつもつかまっているがっしりと岩のようなたくましいじさまの体。それが、「ころり」とたやすく転げてしまう。その手に感じた軽さ、そして、もはや「うなる」しかできなくなっているじさまの姿が、いっそう猶予ならない事態として豆太に迫ってくる。

「医者様をよばなくっちゃ」

これは、誰に向けての言葉なのか？自分自身に向けてである。「夜なんて考えただけでも、おしっこをもらしちまいそう」な「おくびような豆太」をもう一人の豆太がぐっと押さえ込み「よばなくっちゃ！」と言いつけ、腹をくくる。そういう自問自答の言葉である。

「これは、誰に言ってるの？」と問えば、「自分に言ってるの」という読みは3年生の子でも、出してくるのではないだろうか。

豆太は、小犬みたいに体を丸めて、表戸を体でふつとばして走り出した。

ねまきのまんま。はだしで。半道もあるふもとの村まで。

外はすごい星で、月もでていた。とうげの下りの坂道

は、一面の真っ白い霜で、雪みたいだった。霜が足にか
みついた。足からは血が出た。豆太は、なきなき走った。
いたくて、寒くて、こわかったからなあ。

でも、大すきなじさまの死んじまうほうが、もつとこ
わかったから、なきなきふもとの医者様へ走った。

豆太の中にあるのは、「医者様をよばなくっちゃ」の一心だけ。

「すごい星」（くぎらぎらと目に迫るこわい空）も、「足にかみつく霜」も、今の豆太
の意識からはふっとんでしまっている。

叙述から情景を描いた上で、「このときの豆太、『やっぱり小屋に帰ろうかな』という
気持ちも少しはあった？無かった？」と問うことで、このときの豆太に迫ってみたい。